

# 東アフリカ大湖地方におけるバナナの品種多様性に関する人類学的研究

## —Bioversity International でのインターンシップ活動— (1)

平成13年入学

派遣先国：ウガンダ

派遣先期間：Bioversity International, Uganda

佐藤靖明

キーワード：バナナ、東アフリカ大湖地方、ブガンダ、品種多様性、遺伝資源保全

### 派遣先機関の概要

Bioversity International (以下 BI) は、2006年12月に国際遺伝資源研究機関 (International Plant Genetic Research Institute, IPGRI) と国際バナナ・プランテン改良ネットワーク (International Network for Improvement of Banana and Plantain, INIBAP) が完全合併してできた新名称の研究機関である。世界各地に計16のオフィスと320人のスタッフを擁し、総本部がイタリアのローマに、バナナ研究の本部がフランスのモンペリエにある。この機関の大きな目的は、遺伝資源の保全と住民の生活向上を両立させながら推進していくことである。ウガンダ支部は合併前に INIBAP の東部・南部アフリカ支部であったこともあり、従来どおり東部・南部アフリカのバナナに関わる研究を統括・調整する役割を果たしている。



写真1 Bioversity International のマーク



写真2 BI ウガンダ支部

### 派遣先の志望動機と、派遣前に設定した目標について

作物の遺伝資源保全において、現地の品種の多様性を支える文化・社会的なメカニズムと、多様化の植物学的機構を組み合わせる考えの重要性が高まっている。その際、社会科学と自然科学双方からの見解を考慮にいれながら、地域における品種多様性の位置づけをおこなうことが必要となってくる。

これまで報告者は、ウガンダ中部ブガンダ地域において、人びとの認識・行為や社会関係といった観点から、バナナの品種多様性の維持機構に関する調査研究をすすめてきた。しかし、植物学的な視点や、他地域の品種多様性についての情報が不足しており、調査結果の洗練された位置づけができずにいた。派遣先の組織はバナナの遺伝資源事情に精通した自然科学系研究者を中心に構成されており、国を越え

た広い活動範囲を特徴とする。このため、インターンシップ活動をとおしてそれらに関する知見を手に入れることを目標とした。

### 派遣期間中の活動について

1 初期のミーティングにおいて、報告者がおこなってきた人類学（民族植物学）的研究の視点・方法と BI を中心とするバナナ研究グループの視点・方法にずれがあることが明らかになった。その現状をふまえ、人類学的観点から作物の遺伝資源保全を扱った書籍（Nazarea, V. 1997. *Cultural Memory and Biodiversity*, University of Arizona Press）の読書会をおこなった。それと平行して、報告者自身の研究を紹介し、その特長や方法上の課題点について、Deborah Karamura 研究員（遺伝資源保全担当）、Eldad Karamura 博士（所長）と適宜話し合い、指導を受けた。そして、農学・生物学と民族植物学がどのような接点をもちうるのかについて、アイデアを出し合っていくことを確認した。

2 BI において不定期におこなわれるミーティングに参加した。また、ウガンダ政府農業研究機関のバナナ研究プログラムを訪問した。Tushemereirwe W.K.博士（プログラム長）、Ngambeki D.S.博士（農業経済担当）、Nankinga, C.博士（バナナ病害対策の住民参加型プロジェクト担当）との学術的な交流をとおして、近年のウガンダにおけるバナナ研究の動向に関する情報を得た。また、自身の研究について指導を受けた。



写真3 講義をする Deborah Karamura 博士



写真4 農家と話す Eldad Karamura 博士（右）

### 派遣先で印象に残った体験や経験

ウガンダ政府の研究機関や BI の研究者と研究動向を交換し、いくつかの知見を得た。その中で、ウガンダのバナナ研究では、「住民参加型」の方式を組み込むことがすでに主流となっており、どのように住民と協働していくかが議論のひとつの焦点になりつつあるという情報が、とくに印象に残った。ここでの「住民参加型」研究は、新たな住民グループを積極的につくる方法をとる。それに対して報告者がおこなってきた参与型の観察・聞き取りは、既存の社会関係の役割を重視する姿勢をもつ。この違いの発見がとくに興味深い点であった。政府系の研究が「住民参加型」を重視している背景としては、研究プロジェクトを経済的に支えるドナー側が、政府やプロジェクトを調整する BI などの国際機関に対して、農家からの評価を求めていることが考えられる。

### 目標の達成度や反省点について

BI のチームの一員として全面的に受け入れてもらうことができた。このことにより、ウガンダにおけるバナナ研究ネットワークを広く把握することができ、報告者が研究情報を収集する上でプラスに働いた。派遣先が当初イメージしていた「人類学」のイメージと報告者の研究とのギャップが活動初期に明

らかになった点も良かった。ただ、その隔たりを埋めていく方法が容易ではないことも、同時に認識された。